

# あつみ 温海通信機

〒999-7316  
山形県鶴岡市小国庚1番地



## スエヒロ

〒997-0011 山形県鶴岡市宝田1丁目7-28-9  
ホームページ: <https://minnanosora.net>  
「みんなのそら」  
「みんなのそら にじ」

Y E L L Vol. 26



山形県鶴岡市に、地域と住民に貢献することを第一に掲げた事業所があります。  
「温海通信機」(平形和政社長)と、障害児のデイサービス・学童保育「みんなのそら」を運営する「スエヒロ」(平形洋司社長)。和政さんは洋司さんの父で、親子で暮らしがやすい地域を次代につなぐ活動を続けています。お二人に、起業のきっかけや、地域に貢献する事業活動、未来への思いを伺いました。

温海通信機社長の平形和政さん（右）と、  
スエヒロ社長の洋司さん親子

地域貢献を目指す  
事業所の物語

## 強いつながりを持つ 地域で生まれ育つ



中山間地域に広がる旧温海町



地元の伝統野菜「温海かぶ」

和政さんは山形県西田川郡温海町大字小国(=市町村合併により現在、鶴岡市小国)で生まれました。130軒ぐらいの集落で、幼い頃から「地域の子ども」という環境で育ちました。近所で子どもが生まれれば、みんなで喜び、高齢者が亡くなればみんなで悲しむという、強い地域つながりがありました。

村の子どもは村の大人になって村のために働くという社会状況の中で、よその家の子どもも我が子のように大切にし、良くないことをしたならば叱る、という

霧雨気でした。

小さな村で、急病の人が出てもすぐに救急車は来られず、自営業者や大工さんで車を持っている人が運転して病院まで運んでいた地域。「繋がりがなければ生活は容易ではない。みんなが助け合うことが当然の事だった」といいます。

和政さんは回想します。

「小学校から家まで500メートルぐらいの距離で、下校時は村の中を全部通つていくような通学路でした。昼過ぎに学校から帰ると、友達のお母さんが私の分のおにぎりも用意してくれて『ぼれ、おめえも食え』と。子どもは常に腹を空かせていました時代。味噌をつけたおにぎりや、生のキュウリは美味しかった。そこに地域の人たちの『親心』が温かかった」と和政さんは回想します。

和政さんは小学校を卒業すると、家から6キロ離れた中学校に進学します。自転車で30分ですが、冬季は雪が深くて通学できず、村の小学校に併設された「冬期分校」に通いました。高校は鶴岡へ。村からの通学は無理なため、下宿生活を送っていました。当時、高校の授業料が千五百円で、下宿代がその10倍の一萬五千円。肉の配達などのアルバイトをしながら、勉学に励みました。やがて、高校を卒業したら

大都市・東京に行って「本物を見たい、本物に触れたい」という気持ちが募りました。「東京では、印刷物ではない本物のピカソの絵が見られる。本物のライカのカメラに触れたり、素晴らしいジャズの音楽もこの耳で聞くことができる」。そして、東京の夜間の専門学校に進学します。

電気系の技術を学びながら、本物に触れる体験をしました。

「自分なりの体験や感触が大切だという思いがありました。例えばスピーカーの音を自分の耳で実際に聞いて、『クラシックはこっちのスピーカーが素晴らしい』というように」。また、和政さんにとって東京は、良くも悪くも、眞の自分を評価してくれる場所でもありました。「自分がどんなものなのか」を率直に知ることができる—和政さんにとつてはある意味、楽しみでもありました。



北海道へ独り旅をしている20歳頃の和政さん

専門学校を卒業すると、地元温海町に戻り、電気店に就職しました。当時は、高度経済成長期。家々で家電製品を買って、故障しても修理をして長く使い続ける時代でした。電気店の仕事では、それまで東京で学んだ技術が生かされました。地域でも修理ができる人は少なく、電気店では販売から設置、修理まで一貫したサービスを提供しました。

## 請われて会社設立

転機が訪れるのは1973（昭和48年）のことです。地域の問題に取り組んでいた人から、「会社を作つて事業をやらないか」と相談を受けました。この人は、和政さんが中学生の時の校長先生で、この時は教員を退職して町會議員として活躍していました。

高度経済成長期がピークとなり、農村では田植え機や稻刈り機による機械化・省力化が進むと同時に、農家の働き手が余っていました。また、秋の収穫時期を終えた後に長い冬を迎えると、父親か母親あるいは両親が東京や大都市に出稼ぎに行き、地元には高齢者と子どもだけが残されました。「親が出稼ぎに行つて、残された年寄りと子どもが、焚き火や一つしかない裸電球の下で過ごしていました。冬の寒さも厳しく寂しかったけれど、気持ちも寒く寂しかった。それを議員になつた校長が『何とかしたい』と悩んでいたのです」。

議員の提案は、「地元に産業がないのと、農業の機械化に伴つて現金収入を必要とする状況が出稼ぎの理由。親が出稼ぎに行くのは子どもにも良くない。ここに電気部品の工場を作り、地元の人たちを雇用することができたらいい。



地域の女性たちによって支えられた部品製造

一緒に、事業所をやつてみないか」ということでした。「農家の稻倉をすでに借りているから、ここで作業を始めたらしい。働く人も三十人は確保した」と、議員はすでに準備を進めていました。

当時、和政さんはまだ25歳の若者でしたが、議員の熱意と「地域がもっと活気づけば」という気持ち、親が出稼ぎに出た寂しい冬の家々の様子を思い、起業することを決めます。

勤めていた電気店の社長に事情を話すと「村のためになるなら」と理解してもらい、退職。当時の温海地域の人々の職場となるようにと、名称を「温海通信機」と名付けた会社を設立しました。1974（昭和49）年3月のことでした。



設立当時の温海通信機

## 「人に喜ばれる仕事」が原点



冬の間は雪も多く厳しい寒さが続く



1歳頃の洋司さん（右は母のちよさん）



1970年代後半ごろの平形家

「自分がやつてきたことが、村のためになったかどうかは、私が言つことではないと思います。でも、私がやつたことで、村の人たちが喜んで笑顔になること、それは私も嬉しかったですね」と語る和政さん。その仕事の原点は、電気店に勤めていた当時の「大晦日の出来事」にありました。1970年代から温海地域でも各家庭にテレビが普及し始めました。

見られるのは、NHKとYBC山形放送、NHK教育の3局だけ。しかしテレビが最大の娯楽で、配達では家の一番良い場所にテレビを置いてほしいと設置や配線を頼まれました。

和政さんは大忙しで注文した家々を訪ね、数時間かけて設置作業をしました。アンテナの設置で屋根に上ることもあり、屋根が凍つて危険な時もありましたが、この作業だけはやり遂げなければならぬ、という気持ちでした。

「なぜ12月の31日、大晦日に注文していくのか、不思議に思われるかもしれない。もつと早くから注文しておけばいいのに」と。でも、大晦日に注文するには理由があります。それは、東京に出稼ぎに行っていた親父さんが29日とか30日に稼いだお金を持つて帰ってきます。その時に、その稼いだお金で、「家族に紅白歌合戦を見せてやりたい」とテレビを注文するのです。家族全員が揃つてテレビを見ながら過ごす年末年始。出稼ぎの親父さんたちが『テレビをつけて』と頼むんだから、こっちも何とか間に合わせたいと思いますよ」。地元の人たちに、家族団らんの一時を…。その思いは今も変わりません。

テレビが壊れた家を訪ねて修理をして映るようにになると、子どもたちが大喜びしたそうです。「ひょっこりひょうたん島」や相撲中継は特に人気で、放送時間が来ると家族がそろつてテレビを囲みました。毎年大晦日になると、店の電話が鳴ります。「紅白歌合戦が始まる前にテレビを設置してほしい」という注文の電話です。年によっては3軒連続で依頼されることもありました。

和政さんは大忙しで注文した家々を訪ね、数時間かけて設置作業をしました。

「なぜ12月の31日、大晦日に注文していくのか、不思議に思われるかもしれない。もつと早くから注文しておけばいいのに」と。でも、大晦日に注文するには理由があります。それは、東京に出稼ぎに行っていた親父さんが29日とか30日に稼いだお金を持つて帰ってきます。その時に、その稼いだお金で、「家族に紅白歌合戦を見せてやりたい」とテレビを注文するのです。家族全員が揃つてテレビを見ながら過ごす年末年始。出稼ぎの親父さんたちが『テレビをつけて』と頼むんだから、こっちも何とか間に合わせたいと思いますよ」。地元の人たちに、家族団らんの一時を…。その思いは今も変わりません。



紅白歌合戦を見るために住民が出稼ぎで得た収入をはたいて買ったテレビ=1970~80年代（イメージ）

家電製品の設置作業では、家々の中まで入って作業をするため、それぞれの家庭事業を垣間見たり、相談を受けたりすることがありました。

こんなエピソードもあります。冷蔵庫

が故障したと連絡を受けて、和政さんがある家に行った時のこと。無事修理作業が終わり、冷蔵庫は前のように動き始めました。ところが、その家のお嫁さんがコツソリと「電気屋さん、もうこの冷蔵庫はだめだ、と言つてください」と言います。理由を聞くと「もっと大きい冷蔵庫がほしいけれど、おじいさんか買つてしまつてください。もう動かないとなると、言つてください。もう動かないとなると、大きな冷蔵庫を買えるから」。

和政さんは、家庭内で女性には料理や洗濯などの家事が任されている一方で、その家事を軽減するための家電製品の購入に関する決定権が得られていないことを知らされました。そこで、その家の世帯主である男性（夫や父親）に、「じいさんも、生きのいい魚を食うんだろう。もう少し大きい冷蔵庫を買ってあげたら、奥さんもうれしいんじゃないの」と話してあげました。するとその家の夫や父親がああ、そういうものか」と理解して、大きな冷蔵庫を購入してくれました。

温海通信機を始めてからも、女性たちからさまざまな相談を受けました。作業は電気部品の組立が中心で、女性中心でした。あるとき、従業員の中で「できるだけ残業したい」と訴える女性が現れました。その理由は「早く帰ると家事をしなければならない。仕事をしている方が楽しいし、仕事をしていれば家に帰ると姑が食事を作ってくれている」と。女性が外で働き現金収入で家計を支えれば、家庭内での地位も上がることを知りました。



社員全員が参加した温海通信機の忘年会

また先駆的だったのは、「フレックスタイム制」や「副業」という言葉がない時代から、それに似た制度を取り入れたことです。当時は自家用車がない時代、会社でバスを出して従業員の送迎をし、また勤務時間も定期バスの運行時刻に合わせて、始業・退社時間を決めていました。定期バスの従業員は午前7時半に出社して、退社は午後4時半。

夏季はまだ明るい時間での退社で、「家族団らんの時間を過ごせる」「農作業ができる」と歓迎されました。

また先駆的だったのは、「フレックスタイム制」や「副業」という言葉がない時代から、それに似た制度を取り入れたことです。



地域の子どもたちが参加して開かれた交流会

## 起業への思いとは

最後に、自らの事業を興すことへの思いを伺いました。

「誰かに求められて自分が何かの役に立っているとか、そういう思いは捨てた方がいいと思う。自分の望んでいることを、自分の意志でやってみる。それで少しでも他人の役に立てれば幸い」ということが重要。その結果うまくいくかどうかは別ですけどね。私もサラリーマン時代がありましたら、その時は上司の指示があり、自分の思った通りにはやれなかつた。でも自分の意志であれば、失敗しがどうしようが、人のせいにしなくてもいい。そして結果も含めて、物事に納得がいく。そう思っています。

自己実現を追つての50年の間には仕事が確保できず、約400人の従業員の約半分を会社都合で解雇せざるを得なかつた時もありました。今でも従業員には申し訳なく、また、私の力のなさを痛感したことを見忘れることはできません」と和政さんは話します。

じゃないの?と思いましたよ。自分なりにしたいという希望から起業するのだとすれば、いいことだなと思って。できることななら、やっぱり自分の足で歩いてください、ということですよ」と和政さん。

内職の仕事を請け負うために興したもう一つの会社「(有)スエヒロ」の一部門に、洋司さんが立ち上げた障害者事業を位置付け、準備を含めて全面支援しています。

和政さんの思いは息子へと受け継がれているのです。



温海通信機で組み立てを請け負った製品

## 障害のある子どもの 放課後デイサービス事業 スタート

山形県鶴岡市に障害のある小・中・高校生の児童、生徒を対象にした放課後「デイサービス「みんなのそら」「みんなのそらにじ」があります。2023年、通信制高校のサポート校として「明蓮館SNECみんなのそら高等学院」を、今年24年より「個別学習サポートみんなのそら スロー ウォーク」の開始を予定しています。

どんな時でもあるがままを受け入れることを基本に、楽しい遊びの中での成長を大切にし、多彩な活動に取り組んでいます。

和政さんは、息子が東京で学ぶことに賛成し、快く送り出しました。息子に自分の会社を継がせようと考えていたわけではなく、純粋に、自分自身が東京に出て本物と、多くの物事を見聞きした経験を我が子にも体験してほしい、という思いからでした。

大学に進学すると、洋司さんは水泳のインストラクターとしてのバイトを始めます。ここでは、子どもたちが水に親しんだり、泳ぎを楽しむなどのサポートが仕事で、泳げなかつた子どもたちが泳げるようになって笑顔を見せてくれた時には、本当に楽しく、やりがいを感じたそうです。この経験に加え、以前から心理学に興味を持っていたこともあり、大学卒業後は「人と関わる仕事がしたい」と強く思いました。



「すべての家族と子どもたちに幸福感と感謝の気持ちを感じてもらいたい」という思いをミッションに、20年以上障害児の福祉事業に携わってきた洋司さん(社会福祉士)が2016年に故郷で始めました。この会社の特長は、障害児とその家族だけでなく、住民、そして地元の自治体から求められて、地域全体の福祉向上に向けて取り組むために起業し、地域の人々と共に社会的な活動をしている点です。

洋司さんは自然な流れで、東京の大学へ進学しました。

洋司さんは、山形県鶴岡市(旧温海町)で生まれ、育ちました。1974年に地元で電気機械製造の「温海通信機」を創業していた父・和政さんは、かねてから「(次世代を担う)我が子には、日本の首都である東京で暮らす経験をさせたい」と考えており、洋司さんは自然な流れで、東京の大学へ進学しました。

洋司さんは、山形県鶴岡市(旧温海町)で生まれ、育ちました。1974年に地元で電気機械製造の「温海通信機」を創業していた父・和政さんは、かねてから「(次世代を担う)我が子には、日本の首都である東京で暮らす経験をさせたい」と考えており、洋司さんは自然な流れで、東京の大学へ進学しました。

## 大学時代のボランティア から障害者福祉の世界へ

大きな転機になったのが、大学4年生で就職を決める時期に、大学の心理学科を卒業した友人から、神奈川県にある友人の勤め先の知的障害者の作業所と、障害のある子どもの療育施設を見学させてもらつたことでした。建物の1階が大人の障害者の作業所、2階が障害者の子どもたちが個別や小集団で音楽療法などもやつてている施設になつていました。

「行ってみると温かい雰囲気で、すごくいいなと思いました。一人ひとりが仕事を追われている感じでは全くなくて、自分のペースで作業をしていました」と洋司さん。学生の時は週に一度、ボランティアとしてお世話になり、その雰囲気、障害児・者の様子に感動し、「働かせてほしい」とお願いしました。

あと1ヶ月で大学卒業を迎えるというギリギリの時期で、当時その施設では職員を募集していなかつたのですが、施設長などのご厚意により「まずはボランティアを経て非常勤職員から」ということに。そしてそのまま就職させてもらつことができました。「利用者の方々と一緒に時間を過ごしていく毎日がとても楽しくて。あつという間に時間が経つていきました」。



当時の日課は午前8時～身体障害のある方への送迎。午前9時から午後3時までは作業所の仕事開始(宅配寿司のチラシの仕事、ケーキやクッキー作り、園芸の仕事など)。午後3時以降は、療育施設を利用する子どもたちの利用開始(ピアノなどの音楽に合わせて子どもたちを抱っこして走ったり、子どもたちの馬になつて遊んだり、遊びを通した療育)。

それが終わると後片付けをし、職員のミーティング。日によつては帰宅が午後10時をすぎることもありましたが、洋さんは「子どもたちと一緒に過ごす時間が本当に楽しかったです。他のスタッフの人たちも良い方たちで、学ぶことも多くて、自分が満たされている感じがしていました」と当時を振り返ります。利用者だけではなく、働くスタッフ、職員にも満足を与えることができ、またその満足が循環している感覚がありました。その理由の一つを洋司さんはこう話します。

「法人の理念がしっかりといました。

このために私たちはやっているという意識が確実にあって、一人一人の職員に浸透していました。まずは障害者のこと第一でなく職員、事業所に関わる人たち全員に高い満足を提供しようという明確な目的を持っていました」。

当時の日課は午前8時～身体障害のある方への送迎。午前9時から午後3時までは作業所の仕事開始(宅配寿司のチラシの仕事、ケーキやクッキー作り、園芸の仕事など)。午後3時以降は、療育施設を利用する子どもたちの利用開始(ピアノなどの音楽に合わせて子どもたちを抱っこして走ったり、子どもたちの馬になつて遊んだり、遊びを通した療育)。

そもそも、その法人が設立されたきっかけは、障害のある子どもたちを預かってくれるところが地域になかつたため、お母さんが中心になつて無認可の保育園を立ち上げたことでした。その後、事業所は大きくなり、障害児・者の福祉施設へ。「なければ自分たちで作つていこう」という行動力、究極の起業家マインドに敬服する

と同時に、「地域ではまだまだ障害者の福祉事業が不足していて、必要としている人々がいる」という現実も理解していました。



## 鶴岡市に戻つて 相談支援員に

やつてみたい」と決断。事業所を立ち上げることにしました。

洋司さんはこの福祉作業所に11年間勤めた後、故郷の鶴岡市に戻つて、障害者の相談支援専門員になります。障害者の相談支援専門員の仕事は、日常生活でヘルパーを入れたり、働ける作業所を探したり、一人ひとりに寄り添つた支援をする仕事でした。その仕事をしていくなかで、鶴岡市内の障害者の福祉施設やそれに関連した行政サービスなどを理解し、「障害のある人を一番に考えられるような事業所を自分の手で運営してみたい」と思うようになりました。

洋司さんは、当初大人の障害者の施設の開設を念頭においていましたが、たまたま市役所の福祉課の職員の人と話をす

る機会があり、起業について話してみました。すると、「鶴岡市では、障害のある子どもの施設が不足している。地域で始めるのなら、その不足している障害児の施設をやってみてはどうだろうか」とアドバイスを受けました。

洋司さんはこれまで、障害児の療育事業にも携わったことがあります。事業内容も明確にわかっていました。「鶴岡市で子どもたちの施設が不足していて、行政も地域の人たちも求めているものなら、ぜひ



100歳を迎える「クラロン」社長の田中須美子さんを囲んで  
=福島市



「みんなのそら」の職員と平形洋司さん（前列右端）



「みんなのそら」の元気いっぱいの子どもたち

## 施設の名称に込めた思い

事業所の名称は「みんなのそら」にしました。その由来は、洋司さんが神奈川県で働いていた当時、我が子を預けていた子育て施設の名称が「みんなのそら」でした。

「その施設には大変にお世話になりました。保護者同士もとても仲が良く、子ども含めて親しんだ施設でした。施設の方に同じ名前を使わせてほしい」とお願いしたところ、「どうぞ使ってください」と言っていただきました。また現在、弊社のホームページで使用している家のデザインのイラストも、使わせてもらっています

「みんなのそら」という名称からくるイメージは、そのまま活動の理念に通じています。「空は、障害のある、ないにかかわらず、すべての人々があるがまま、等しく包んでくれるもの。そのように、すべての人が生き生きと暮らせる社会を作りたい」という願いを込めました」と洋司さん。

「みんなのそら」では、さまざまなおやアイデアを凝らした、多様でユニークな活動プログラムが提供されています。その活動メニューはなんと約40種類。一例として、東北では秋のイベントなどで、芋を入れた煮汁を食べ、肉や野菜の

バーベキューを楽しみますが、みんなのそらの芋煮会では熊の肉が出ることがあります。この熊肉は、洋司さんの母方の親戚にマタギ(免許を受けて野生動物の狩猟を行う)の方がいて、その人が提供してくれるそうです。芋煮会の会場は廃校になつた「小国小学校」の校庭を使わせてもらうなど地域の方からも調理補助などでも協力をいただいています。

このほかにも自然環境や地域の文化に触れる活動を取り入れています。ユニークなのは、地引網体験です。地元で観光業をやっている人の協力を得てこの企画を実施。知り合いの人、地域の子ども育成会なども参加して、賑やかな体験事業となっています。

また、山形県の農産物の山ぶどう狩り。障害児のなかには多動の子どももあり、各家庭で屋外での活動、あるいは屋外での芋煮やぶどう狩りといった体験は、保護者からすれば「本当は子どもたちに体験させたい。でもいろいろ大変でリスクもあるため、させたくてもできない」とためらいを覚えます。そこで、事業所として企画して実施しています。保護者の「体験させてあげたい」という思いを実現しています。

## 有限会社スエヒロが 目指すもの

このほかにも、洋司さんは利用者の願いをかなえる活動も予定しています。最初に神奈川県で務めた法人では、知的障害者同士の結婚もサポートしていました。「知的障害者同士の結婚は、まず周りが反対します。知的障害者ということをよく知っている人でさえ、結婚、出産ということになると、『子どもが子どもを産んでどうするんだ』『どう厳しい言葉を言つたりします』と洋司さん。障害を抱える方があるがままに、その人らしく生きていくためには、まだまだ課題はたくさんあります。

洋司さんは、これまで多くの保護者の相談を受け、その不安を受け止めてきました。

た。「障害を持った子どもの保護者は、子どもの将来に不安を抱いている方が多いです。お母さんの話を聞いていると『うちの子が普通にやれました(普通に行動できた、普通の体験ができた)』とか、『うちの子は、こう、こうことは普通にできるんです』『どう、どうことは普通にできるんです』』など、いろいろな言葉を聞くことがあります。私は、一人ひとりがありのまま、あるがままでいいと思っていますが、それってどういうことだらうかとずっとと考えていました。「普通ってなんだろう」と。そこで思つたことは、「普通とは、人の役に立つことではないだろうか」ということでした。障害がある人もない人も、人の役に立てる事、他人に喜びを与えて、共有すること、それが普通なのではないかと。

「みんなのそら」では、人の役に立ち、喜びを分かち合つ社会的な活動も積極的に取り入れています。一つは缶バッジプロジェクト。みんなのそらにじの子どもたちが、缶バッジを作つて、企業に購入してもらつもので、そこで得られた益金は、オレンジリボン運動(「子ども虐待のない社会の実現を目指す市民運動」)や子ども食堂の運営に使われています。

また、福島ひまわり里親プロジェクトにも参加しています。「何かしら復興支援をしたいとずつと思つていました。その時にひまわり里親プロジェクトと出会ひ、子どもたちにも社会貢献をさせてもらつています。ひまわりの種を植えて、水やりをして育て、収穫してタネを取ります。ひまわりが咲いたところで子どもたちに入つてもうつて写真を撮つています。ひまわりの花の前で写真を取ると、子どもたちが自然に笑顔になります。福島ひまわり里親プロジェクトを通して、子どもたちがいい表情になつていく。その笑顔を写真とともに届けたいと思っています」と洋司さんも笑顔で話します。

「みんなのそら」は、その後、同じ鶴岡市内に2か所目の事業所となる障害児のデイサービス「みんなのそら にじ」を開設しました。

そして将来的には、大人の障害者の方の生活のためのグループホームや事業所、障害者雇用などを考えています。障害のある方や子供たちがご家族や地域を支えていくような社会を目指しています。障害があつてもなくともあたたかさとやさしさを感じられる日常に貢献することで、地元鶴岡を感動の街にしていくことを目指しています。



「みんなのそら」は福島ひまわり里親プロジェクトに参加



2016年



2017年



2018年



2019年



- 11 -





2020年



2022年



THANKS!

2023年



## 採用と教育研究所

saiyoutokyouiku laboratory

志ある中小企業経営者の応援団として「採用から共育」まで一貫した支援サービスを行っている。これまで数多くの社員、職員の採用・人財育成・職場定着等に携わり、CSR（社会貢献活動）を活用した「いい会社創り」のサポートとして定評がある。



Y E L

Vol. 26

2024年3月9日

発行：採用と教育研究所  
〒960-8055  
福島県福島市野田町 6-7-8  
電話 024-529-5153  
[info@saiyoutokyouiku.com](mailto:info@saiyoutokyouiku.com)

